

自らの肉体を捨て、
天皇の大御心のそばに帰一する精神――。

三島は「自決」によって 日本人の覚醒を期待した

荒谷卓・特別インタビュー

野次を制止した自衛官もいました

―三島由紀夫の自決。元自衛官の荒谷先生はあの事件のこと、そして自衛官の野次をどう思いますか？

荒谷 あの野次は当時市谷駐屯地にあった幹部学校の学生なんか飛ばしたそうです。

―あれが当たり前なんだと。

荒谷 市ヶ谷台でやるということは、あの意味、野次は予想されたと思います。最初に集まってきたのは東部方面總監部の人間と、幹部学校の学生なんです。あそこに幹部学校がありましたからね。東

方總監部の幕僚たちしてみれば、指揮官を人質に囚われたのだから反発の心情はあったでしょう。幹部学校の学生たちは、組織のトップを目指すエリート幹部です。当時、彼らは口々に、旧軍との断絶を誇りとしていたわけです。そういうカルチャーの人間にとって三島は、狂気の沙汰さたと言いますかね、そもそも考え方が間違っているということなんでしょうね。―事件のあと、自衛隊内でアンケートを取ったら、三島さんに対する反発がずいぶんあったようです。

荒谷 市ヶ谷には三十二連隊という普通科連隊も駐屯していて、そこから駆けつ

荒谷卓(あらや・たかし)

昭和34年(1959)、秋田県大館市出身。武道家(明治神宮至誠館三代目館長)。元陸上自衛隊一等陸佐、特殊作戦群初代群長。



自衛官の下 の階級で、また若い人ほど 三島の精神に共鳴する比率は高かった

けた隊員は、何だかよくわからないけど三島がバルコニーで叫んでいるのに幹部学校の学生たちの野次で聞こえないから、逆に「うるさい！ 黙れ！ 聞こえないじゃないか！」なんてやっていたらしいですね。

—そうですか！ そういう人もいたんですね。

荒谷 もちろん。少数でしょうけどね。僕の感触から言っても、下の階級で若い人ほど、三島の精神に共鳴するものがある人の比率は高いと思います。そういう隊員は、自衛隊に入る動機そのものが比較的純粋なんですよ。

三島と富士学校とかで一緒に訓練したレンジャーの隊員だとかは、自衛隊全体でいうと下々の隊員なわけです。そういう人々には、真面目に国を守ろうと思えば、死ぬ場所を探して入隊した連中がいて、死に場所を探して入隊した連中がいて共鳴したでしょうね。ところが市ヶ谷台は上級司令部とエリート学校ですから心情的にはかなり違っていました。

武士が肉体を滅ぼす時とは

—あの自決というのは、荒谷先生から見て、何を意味していたのか、何を訴えた

かったんでしようか。

荒谷 切腹というのは、死に対する主体的な行為です。自分の生死に関して主体的に決定していく。そして、その主体性の根底というのは、物質的な肉体を精神が超越するという象徴的な行為です。精神的な存在としての自己ということ考えたときに、身体というのはどうしたって環境的な要因が強すぎて制約が多すぎます。「作家・三島由紀夫」、あるいは著名人であるということとか、いろんなことを考えたときに、身体としての三島由紀夫が取れる可能性というのは極めて限られてきます。これは、武士が切腹するときもそうです。志を達成せんがために肉体を駆使できる間は当然、心身ともにその方向に向かつて動いているわけでしょうけれども、物的存在としての自己に付随する身分とか立場だとか、そういうものが邪魔になつて精神の発動が妨げられると感じたときには肉体を滅ぼすわけです。そういうしないと、精神が腐敗するといいますが、滞つてしまふんですね。

精神が滞るといふことは、「氣」が滞る、「氣が枯れる」、つまり「穢れ」です。身体を保全するがゆえに精神の発動が停滞して、気持ちというものが衰退していき、気が枯れて穢れる。そういう穢れを嫌つ

て自ら肉体を滅ぼす。そこから魂の自由、精神的な自由を勝ち取るわけです。そういう境地だったということじゃないでしょうか。それを三島が日本の伝統文化というものの中の側面を象徴する武士道に則つて実行したと、そういうことだと思えますよ。

—それは、文学者や評論家には見えないことですね。さて、三島さんは、未来の日本を予言しながらいろいろなものを書き、憲法についても研究会をつくりました。いま荒谷先生も憲法を研究されていると伺いました。

荒谷 まず日本人のひとつの魂に宿っている性質を考えてみましょう。日本は「君民一体のお国柄」とよく言うわけですが、ここには日本人としての強烈な価値観が前提にあります。それをもっとも簡単に言えば「世のため、人のために心を尽くし力を尽くす」ということなんです。「帰属する社会に対する貢献の精神というものは尊い」という社会的価値観が、最も重要な土台であるわけです。これはおそらくは、天照大神の神勅により天孫が稲作を広めた結果、非常に長い時間をかけ

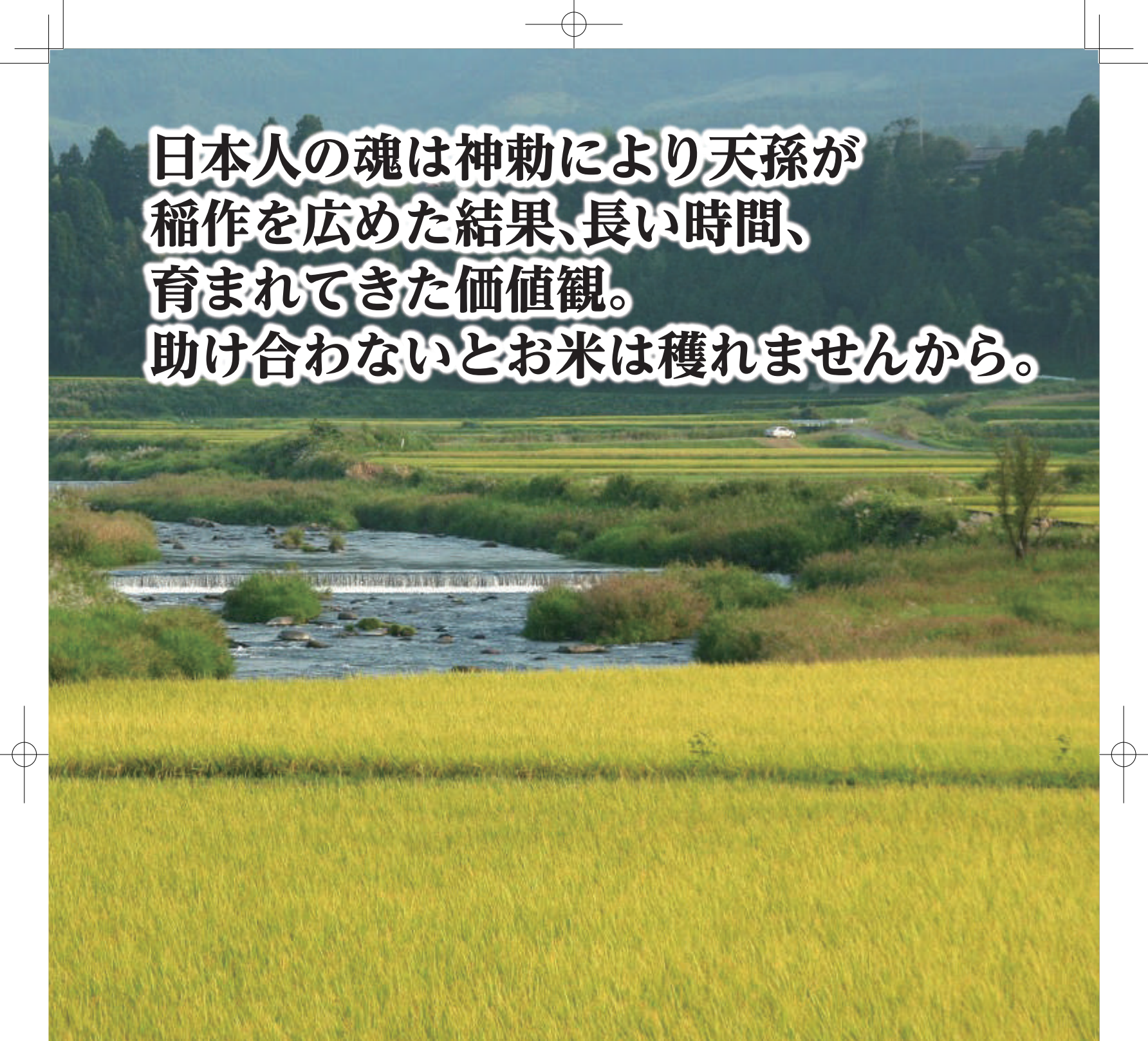
ながら、育まれてきた価値観でしょう。稲作というのは、みんなで協力しないとできません。お互いが助け合わないとお米は穫れませんからね。稲作が、協力して人々を育て社会を育むという慣習を根付かせ、文化として定着させたんです。獲物を先に獲つた方が勝ちという社会慣習ではないんですね。

—そう考えたときに、誰が一番世のため人のために心を尽くしているか、ということになるわけです。そこで、「国安かれ、民安かれと、ただひたすら祈りを奉げる天皇陛下のご存在は極めて尊い」ということが成り立つんです。

天皇陛下の統治というのは「しろしめす」ということですが、しろしめ

▼総監部のあった建物は、いま市ヶ谷記念館として敷地内に移築されている。そこにいき事件を思うにつれ、三島精神を強く感じる





日本人の魂は神勅により天孫が
稲作を広めた結果、長い時間、
育まれてきた価値観。
助け合わないとお米は穫れませんから。

▲稲作文化が消えてしまった時、日本は亡んでしまうのではないが

す、きこしめす、みそなわすと云って、差別なく心を知ってくれる、差別なく聞いてくれる、そして差別なく見てくれる。日本の神社の神さまは、みんなそうで、お参りに詣でた人々の心をしろしめしてくださるわけですから。天皇陛下はまったく神々しいご存在なんです。

なぜ天皇はしろしめすだけで統治できるのか

—なぜ、しろしめすだけで統治ができるのでしょうか。

荒谷 天皇陛下は一切、命令はされません。「お前こうしなさい」とか「ああしなさい」とか、そういうことはおっしゃらない。知ってくれるだけでなぜ統治が成り立つかという点、国民側が（天皇陛下を）尊いご存在だと思っているからです。ですから、国民の心がそこに集って、自らそれを範にし、主体的にそれに従って自分の力を尽くそうとする。天皇陛下の万分の一でもいいから、そのご心境に近づいて、自分も自分の立場で、世のため人のために力を尽くそうと、国民側が主体的にアプローチする。だから統治になるわけです。逆に、天皇陛下の大御心を他人に強要するようなやり方は断じてよくありません。あくまで、国民一人一人の主体性が大事なのです。

ですから、日本のしろしめす統治というものは、天皇陛下の大御心と国民の側の主体的忠義で成り立つわけです。ここで大変重要なのは、天皇陛下だけいらっしやっても君民一体の国は成立しないということです。神社の神さまと同じで、

その神さまが尊いと思つて参拜に来る人がいなければ、その神社はさびれて朽ち果ててしまいますね。ですから、国民側が天皇陛下を尊んで、なおかつ自分が社会に積極的に貢献しようという主体的な意識と行為がないと、日本の国は成立しない。「君民一体の国柄」というのは、そういうことだと思いますよ。

だから僕は、この三島の行動というのは、伝統文化を防衛する立場の日本国民としての気概を示したのではないかと思っています。「三島由紀夫」という肉体を持った存在として強烈に極まり、いったん精神を忠心に帰一し、それによって君民一体というものを示した。だから「そのあとに続く者を信ずる」というのは、ただ思想的にそういうことを考えるところか、同じようなことをするとか、狭い意味ではないと思います。自らの肉体を捨てても天皇の大御心のそばに帰一しようという精神を、国民側として強烈に顕現することによって、日本人の覚醒を期待したんじゃないかと、そう思いますね。

要するに、文化防衛というのはいささかうことですよ。国民の一人一人が、天津日嗣たる天皇陛下の大御心に帰一しようという思いと行為がないと、日本文化は防衛できないんですよ。『文化防衛論』にもありますが、ただお茶とかお花をやっているだけでもダメなんです。武道だつて、道場で稽古しているだけじゃ何の意気もないわけですよ。

—そうですね。

荒谷 それをやることによって、いかに天皇陛下の大御心に副い奉るかということが大切なんです。そこで培った自分の心身の力というものを、どのように社会に貢献できる形にして実行するか。そういう心と工夫がなければ、いくら身体を鍛えようが全然、意味がありません。

統帥権とは天皇の権限であつて、軍の権限ではない。

荒谷 檄文でも、結局、自衛官の国家を思う忠誠心が天皇陛下にむかつてないと意味がないんだと説いていますね。憲法だとか法律だとか、日米関係だとか、そんなところに忠誠を示していたのでは、日本を守るといふ根本的な考え方において不十分なんです。

過去、日本の実質的な政治・政体の権勢を誇つた武士団は、武門の統領に忠誠を尽くしますね。その統領が天皇陛下に対する忠誠心があるときには、間接的に天皇陛下に対する忠誠心ということになっていきますが、その統領にその精神がないと、そこで断ち切れてしまう。いつの世も、そこが政権の末期ですよ。北条にしても、足利にしても、徳川にしてもね。統領が一番なくなってしまつて、天皇陛下に対する忠誠心がなくなった途端、日本全体としてのまとまりを欠き、社会が混乱するわけです。残念ながら、

どんな立派な統領でも、どんな立派な総理大臣でも、一門一党に偏向してまずし政治という俗の仕事をしていますから、損得、勝ち負け、立身出世、そういう心境から脱することはできないわけです。天皇陛下の大御心には、とてもなりえない。そうした人間が精神的な中枢にはならないし、なつてはいけません。

日本の国民の大多数は、そこは未だにちゃんとしている感じはありますよ。大震災のときなんか、みんな被災者を助けなきゃという意識が動いて、そしてやはり、天皇陛下がいらっしゃると本当にありがたいと思う。それは、天皇陛下が本当に国民のことを思ってくださるご存在ということが、みんなの求めているものだからそう感じるんです。そこに菅さんとかが来たところで心うちが違つたので、受け入れられないわけです。

—今回の震災で、天皇陛下の尊さというものはおよくわかりましたね。

荒谷 ええ。今回は本当に、日本人みんながそこに気づいたんじゃないでしょうか。—さて統帥権の問題ですが、これについて三島由紀夫も「楯の會」会員に問題提起をして会内の憲法研究会で討論しています。

荒谷 あたかも統帥権があつたから軍が暴走したんだというように言われていますが、統帥権というのは天皇陛下の権限で、軍隊に何か特別の権限を与えているわけではありません。それを軍側が、と

いうよりは行政権を持つ役人的性質によつて法律をうまく解釈して、自分たちの権力を拡張しようということが出てくるわけです。

歴史を見てみますと、突然軍隊がそんなたわけではなくて、政府側が、軍側の要求、たとえば予算権とか編成権とか、本来、大日本帝国憲法では、帝国議会が権限を持っているはずのところまで妥協するわけです。

その妥協を重ねた結果、軍側が憲法の規定を超えて、自分たちの考えを主張するような仕組みをつくつていったわけです。でもそれは、ひとえに、本来権限を持つている政治の立場の方がちゃんと憲法に従つて、ダメなものはダメだと言つておけばいいものを、遠慮したり、強く出る者に対して引き下がつたり、ということが重大な原因だつた。統帥権があつたから軍が暴走するとかというのは、安易な分析だし、正しくないと思います。

本来崇高な考えを持っているのに、実行する側がそれを曲げて解釈して、自分たちの権力志向の道具にしてきたというのは世界中で起こってきたことです。天皇陛下の大御心というものを、自分たちの組織権益のために拡大解釈したり、本来与えられているはずの権利を施行しなかつたり。そういうところに問題があつたわけだから、正すのなら、そういうところを正すべきですよ。

権威を権力として利用する者をどう防止するか

歴史の教訓としては、不当に権威を権

総理大臣でも損得、立身出世の 心境から脱することはできない。 天皇陛下の大御心には とてもなりえない

力的に利用しようとする者をどのように防止するかと、そういうことを考えた方がいい。今の憲法だって「国民主権」なんていって、国民が一番上位に来ているはずなんだけど、どう見ても実際的にはそうならないよな、現実の社会は。ということは、何かの形で歪められているわけですよ。その歪めているものは、いま現に権力を行使している組織であったり、人物であったり。我が国の伝統文化と全く違う価値観の現憲法ですけども、その現憲法ですら、根本的な思想は現に歪められて施行されている。

もし、統帥権がだめだから解体したというのであれば、いまの状態だって、現憲法の理想とする理屈通りになっていないじゃないですか。それなら即刻、今の憲法をやめたいですよね。国民主権の実態なんかないでしょう。

—ああ！なるほど。
荒谷 軍人は、ふつうの一般公務員と違って、生き死にの問題を国家の命令に

よって決定されるわけです。ということとは、その命令には生死を超えたひとつの社会的なコンセンサスを得られている価値観がないといけないわけです。生死の問題ですからね、損得じゃないですから、これは。命令そのものというよりも、その命令を発するに値する人物が統帥権を持つべきでしょう。

—天皇陛下ですね。
荒谷 総理大臣はコロコロ変わる。次は誰になるかわからない。そういう人たちと天皇陛下を比べたときに、「生き死に」に関わる決断を命令として兵士に下せる、そういうご存在としてどちらがふさわしいかということを考えてみたらいいわけですよ。統帥権とはそういうものなんです。指揮権は別です。指揮権は作戦上の合理的な指示ですから。だから、指揮権は組織的に軍隊の長に与えればいいのであって。でも、人間の生死にかかわる最終決断をできる人は……
—やつぱり天皇陛下ですよ。

荒谷 軍人として将軍として優秀な軍人はいたとしても、その人間が本当に「生き死に」の問題に関して全兵士が全幅の信頼を置ける人間であるということは、可能性としてはきわめて低いわけです。だから、政治にしたって、政治能力に長けた政治家であっても、人格的に必ずしも万全とは言えない。ただ、政治機能とか軍事機能を考えた場合は、やはりそういう能力を持った人間にやらせない、政治と戦争はうまく運用できないわけですよ。

—しかしながらそれは、すべからず国民の生活と「生き死に」に関わってくるわけですから、それについて最終的に決断できる、あるいは行政権、指揮権を与えられる者が模範とすべきご存在、これが統帥権を持てる人ですよ。あるいは憲法上の天皇の大権といわれるものですよ。そもそも陛下は、しろしめすご存在なので、専制的な命令は下さないんですよ。自分の心を推し量れと、朕が意を体せよというところまでしか言わないわけです。でも、その「朕が意を体せよ」という崇高なる精神のご存在があった方が、ないよりよっぽどましだと思わないのか？ というのが、逆に僕が不思議に思うところですね。政治だとか経済だとかの能力のある人間を国

政に任ずるものとして選んだとしても、その上でひたすら「国安かれ民安かれ」と祈る天皇陛下の御存在があるのだから、そのお気持ちも体してくれよと。そうでないと、今の経済のように、何でも合理的に功利的にパッパ、パッパとやっちゃうもんだから、下々の人たちがそれによってどんな思いをして生活をしているかということに心配りが行き届かないじゃないですか。そういうことだと思えますね。

—今のお話を聞いてみると、日本に憲法なんていらぬですね。江戸時代だってちゃんと天皇陛下がおられたんですから。

憲法は限りない妥協の産物

荒谷 幕末に植民地化されかけて、不平等条約を結ばれて、その条約を平等に改正するためには、西洋近代列強と同じような政体を作らないと彼らが国際交渉の相手として認めないから、いかに日本の伝統精神を保守しながら、西欧式の成文憲法を作るかに多大な苦心をしたわけです。—大日本帝国憲法も欧米に対する妥協と苦心があったと。

荒谷 本来日本は、成文憲法がなくても社会が運営できる社会慣習があるんですから。江戸時代までは、地方自治は中央政府は直接的には管理していませんでした。庄屋・名主、組頭・年寄、百姓代等の地方三役等の制度があって、地方の都市は地方自治で運営されていた。江戸だと、一番下は向こう三軒両隣という五人組でしょ。そして、その五人組が、誰かが今日は一銭もなくて飯も食えないとなったら、必ずそのまわりの家にご飯を



▲天孫降臨して九州に稲作を中心とする豊かで平和な農業社会を築いた神武天皇は、高天原の精神を部族抗争に明け暮れ混乱する東方に向けて遠征し、荒ぶる神となって征した。そして「正しきを養い」「慶を積み」「嘩を重ね」た偉大な統一国家(瑞穂国)を建設しようとした。その心が日本人の魂の中にある。江戸時代、外国人が日本を訪れて驚愕したのは、日本人が礼儀正しく、貧しくても笑顔を見せて、幸福な顔をしていることだった。明治になって西欧の近代化に追いつこうとしたが、いつの間にか豊かな心まで変貌してしまった!?

作ってくれるし、病気だったらみんな世話をみるし、そうやって共助の体制ができていて、お金が一文もなくても、米びつにお米が一粒もなくても、何も困らないわけです。田舎はまして田んぼをやっているわけだから、もっと大きい集団でそれをやっていた。今のように孤独死とかストレスなんかはない。当たり前のように生涯を完遂するわけです。お互いに助けあう慣習が日本の隅々にまで行き届いていたわけです。だから、外国の連中が来たときに、日本人はただの一人も不幸という心の顕れというものを知らないと、とにかくみんなが心から平和を喜んでいると驚愕しているわけです。もし、当時の国民の幸福度を調べたら、日本はダントツで世界一だったんじゃないですか。

結局、欧米的近代化によって物質的には豊かになったが、肝心な心が不幸になっていったというわけです。欧米では、伝統的に国民が不幸な中の社会をどうやってまともにしようかという契約的な憲法を作らなければならなかった。でも、日本は、そんな契約的成文憲法を作らなくても平和な社会が営まれていたわけです。でも、明治に入って西欧との関係をおもんばかって、彼らと同じ仕組みの憲法を作った。でも、もう一回考えたらいいんじゃないでしょうか。



—「憲法を変える」ではなくて「欧米的思想の憲法を捨てる」。素晴らしい。

国民典範を作れ

荒谷 そのうちまた世界的な大きな時代の波が来ますからね、そのとき、今やっているようなチマチマした憲法改正議論を考えていてもね。僕なんかいま考えているのは、皇室典範と国民典範。なぜなら、

欧米的近代化によって 国民は不幸になってきた

日本人君民一体ですから。

—国民典範ですか！

荒谷 そうですよ。君民一体で、日本全体として一つにまとまるには、さっき言ったように、天皇陛下を尊いと思って、天皇のまわりに日本国民が集結して、お互いに「世のため人のため力を尽くす」価値観で社会を営んでいこうという、八紘(やっしゅう)為宇(い)を実現するのは国民ですよ。八紘為宇を祈るのは天皇だけでも、それを実現するのは国民なんですよ。その国民にその性質がなかったらできないんですよ。

—ということは、僕は、憲法より上位の国体規範として、皇室典範とともに、「国民はかくあるべし」という国民典範がないといけないと思う。

難しい話はいらないと思います。世のため人のため力を尽くすということだけでもいいと思いますよ。逆に言うと、その二つがあれば、あとは諸処の状況において適時適切に考えてあつたれと言ってもいいわけですよ。

—国防的なことは？

荒谷 憲法で規定しないと日本国民は国を守らないと思いますか。こまごました手続きは法律で定めておけばいい。

—外国が攻めてきたら……。

荒谷 日本が本当は戦争にもものすごく強いのは、本当に平和を探索するがゆえです。それも、主體的に平和な世界を自分たちで創っていかうとしているからこそ、それを乱そうとするものは絶対に許さんという正義の心が強いんです。もし、合理的・功利的に利益を考えていけば、戦争でも相手の方が強かったら「相手が強いから、これでやめておこう」と。とこ

三島の精神をコピーして オリジナルにすることが重要ですよ



—それを三島さんは、戦後体制、アメリカの思うように生きていく日本人というのを糾弾していくわけですよ。

荒谷 たえばシリア問題にしたって、日本はアメリカがやると言えませんが「はい」と言う。ドイツなんか反対しているじゃないですか。反対したらドイツとア

ろが、本当に平和を創造しよう思っている人間は、そんな妥協はしません。事大主義を嫌うんです。

平和というのは受容じゃないんです。創造していくんですよ、つくっていくんですよ。日本人は、創って行く側の立場にならないといけません。世界の平和は日本人が創るんだというぐらいの使命感を持たなければ、それを乱すやつはこらしめなければいけない。だから強いんですよ。相手が仮に自分より強くても、日本の侍は「弱きを助け、強きをくじく」を名譽としていたわけであって、相手が強ければ強いほど戦闘力が上がるわけです。そういう強さを武道で育成していかないとダメですよ。

メリカの関係が悪くなるかと言えは、悪くならないですよ。ちゃんともを言っているということが大事なんです。ところが日本は「はい」と言うんだけど、現実には何もしない。アメリカから見たら、やると言ったのに何でやらないんだとなる。よけいに軽蔑されてしまう。防衛問題は全部そうです。米国から見たら、まるで「やるやる」詐欺に見えるんじゃないでしょうか。

—さて三島さんは、「楯の會」の会員に「米作りも工業化して、いずれ日本で稲作をするのは天皇家だけになるだろう」と言っていた。そんな日本にはいけません。しかし、TPPを見てみると、そう

なってきたんだなあと思います。

荒谷 本所にそこは、文化防衛のかなり瀬戸際ですよ。世のため人のためというよりも、自分のために生きることの方が正しいんだという意識に転換させようとしている。もし日本国民の意識がそう変わってしまうと、日本の国は解体するんですよ。三島が一番恐れていたのはそれではないでしょうか。

だから、伝統的な「他者のために頑張ることが尊い」という国民の価値観を高める社会制度をつくらないといけません。

三島の精神そのものを宿している日本人がいますよ

—三島さんが考えた民兵組織「楯の會」はいい考えだと思いますが、どうですか。

荒谷 自衛隊の性質を日米同盟のためのものとするならば、やはり皇軍的な性質の軍隊がいないとバランスが悪いですが、でも、それを国家がつからないというのであれば、国民の側からそうした性質の義勇軍をつくらなければいけません。国家緊急時のための非武装の義勇軍は法的には問題ないですよ。

—そうか！ その手があるんですね（笑）。最後に、もと当時の三島由紀夫に何か言葉をかけるとしたら、どんなことを言われますか。

荒谷 三島さんに対して何かを言うという事ではないですけど「そういう精神はまだ生きていますよ」とご報告いたします。第三者的に、三島の外に立って三島を評価するのではなくて「三島の精神を宿している日本人がいますよ」と。「文化防衛論」で、書いていたような、「日本文化は、オリジナルとコピーの弁別を持たない」継承という、日本独特の文化のスタイルですね。

—連続性ですね。

荒谷 『文化防衛論』でいうとコピーがオリジナルとなる、という連続性。いくら三島を評価してもね。特に文学者の人なんかは、やっぱり自分は自分なんです。外側において、亡き三島を評価しているわけなんです。自分の外の存在としての三島を語っている人が多い。僕は、それは三島が期待したものではありませんと思うんです。要するに、三島のモニュメント、記念碑みたいに考えている。そんな記念碑をつくってもらうのは彼の本意でもなんでもないし、むしろ彼が嫌っていた部分、つまり「死んだ文化」ですよ。文化として死んだということですから。

—そうじゃなくて、その精神をコピーして、コピーしているうちにオリジナルになつていく、そこが三島精神の継承というものではないでしょうか。だから、当時の三島をとにかく言うんじゃないかと、今の状態で「三島の精神」を顕現するということが、僕は重要だと思います。

(了)